

何かが生まれるとき、そこには必ず、その誕生を受け止める空間がある。新しく生まれた「それ」にとって、その空間は出生地であり、外の世界との最初の接点であり、存在することの原体験となる。ゆえに**誕生の空間とは、新たに生成されたものを迎え入れ、保護し、観察し、形づくり、やがて外の世界へと送り出すための条件そのものである**。本展は、建築をそのような生成の媒介として捉え直すところから始まる。

今日、この問いは、生成AIや植物工場をはじめとする生成技術の発展によって、かつてなく切実なものとなっている。私たちはそれらをしばしば、人間と機械、自然と人工、自律と制御といった対立図式のもとで理解してきた。だが本展が着目するのは、そのような二項対立ではない。ここで生成とは、単なる出力ではなく、空間に受け入れられ、訓練され、ケアされ、規範化され、社会化されていく過程として捉えられる。**問われるべきなのは、何が生成されるかだけではなく、生成されたものが、いかに世界のうちに位置づけられ、存在するようになるのかということである**。

その原型として本展が見出すのは、出産や養育に象徴される人間の根源的な「迎え入れ」の形式である。歓待とは単純な受容ではない。見慣れないものを迎え入れることは、同時に条件を与え、境界を設け、役割を定め、その新参者をケアと制御の構造へととらすことでもある。そこには、ホスピタリティと規律、愛着と権力が切り離しがたく共存している。本展は、日本館をそのような両義的な生成の空間、すなわち新たな存在を一時的に宿し、育み、社会へと接続する interior として立ち上げる。

本展は、AI一般についての展覧会でも、機械の未来についての思弁的な幻想でもない。むしろ**本展は、創造の後に起こることを問う建築的提案である**。新しい何か interior に迎え入れられ、ケアと制御を通じて形づくられ、やがてより広い社会的現実の一部として世界へ送り出されていく。その通過の全体を、日本館という建築空間そのものによって、ひとつのオントロジーとして提示しようとするものである。そこには、東洋的な八百万のコスモロジーを背景としながら、生成されたものを敵対的な異物としてではなく、関係のなかへ迎え入れるための想像力が通底している。病院、学校、住居、保育施設がそうであったように、建築は長らく、生を受け止め、方向づけ、保護し、分類し、再び社会へ送り返す通過の装置であり続けてきた。本展は、その根源的な役割を、現代の生成技術に応答するかたちであらためて可視化する。

キュレーター草野絵美・副キュレーター丹原健翔

PULSING NURSERY

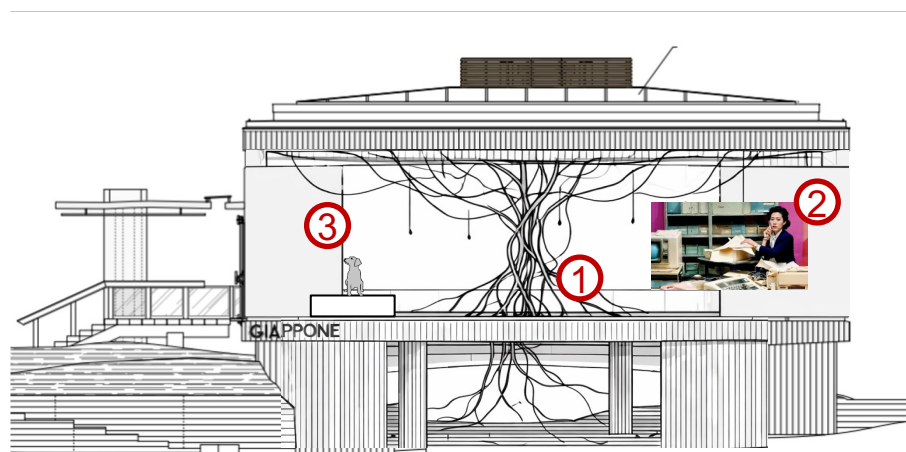
—生成の場としての建築と、これからの時代のホスピタリティ



生成AIを用いたイメージ画

展示の空間実装について

1956年に竣工した吉阪隆正設計の日本館は、展示室中央をピロティから天井まで貫く開口部と、そこへ降り注ぐ天窗の光によって特徴づけられている。本展はこの中心構造を、単なる吹抜けではなく、異なる位相のあいだを媒介する建築的装置として捉える。とりわけ重要なのは、この垂直軸に新たな方向性を与えることである。空間全体を、下層から上層へ、さらに天窗を経て外界へと向かう運動として再構成し、ピロティを発生・培養・蓄積のための基底面とし、上階を観察・遭遇・定位のための場として読み替えることで、**中央を貫く”生成システム”は地上の我々の反応を感じ取りながら日本館をナーサリーへと変容させる。**



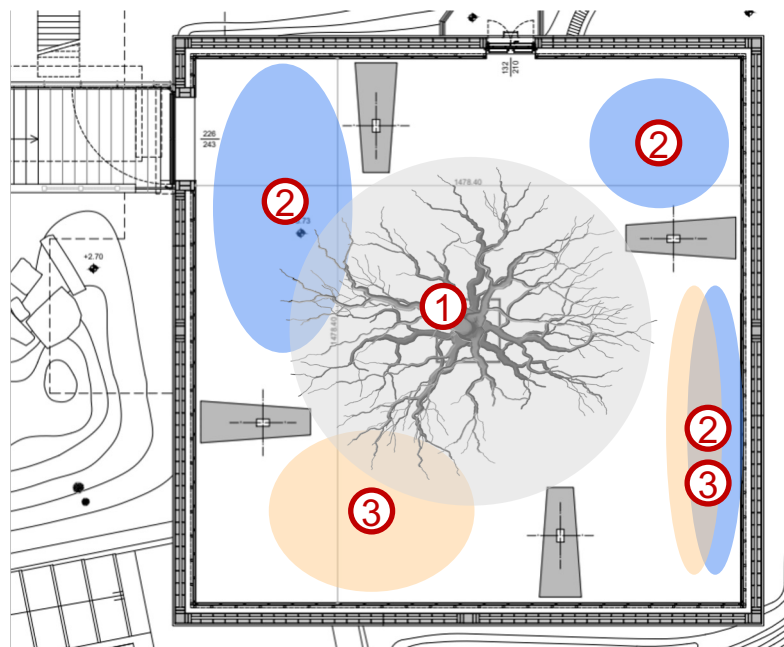
① 中心には、“生成システム”を体現する母体樹として構想されるアンドレア・サモリーによる新作の大規模な作品が据えられる。樹木のような中心体から広がる根のような造形は、周囲の情報を吸い上げ、一時的に宿し、インキュベートしたのち、天井へと伸びる幹を通して外の世界へ「それ」を送り出していくかのである。バイオSFや特撮のセットを思わせるこの作品は、内部に光を脈動させながら観客を観察する装置として、本展の世界観を象徴的に示す核となる。本作は鉄骨と3Dプリンターで制作される。



② 草野絵美は本展に合わせて新作を出展予定。これまでの草野の活動の延長線上にある、生成AIによって増幅されるさまざまな社会のバイアスが映像やイメージとして立ち現れ、観客に社会認識や自己反省を促す装置性を本展では意識する。



③ サエボーグのラテックス製の犬の着ぐるみ「サエドッグ」を用いたパフォーマンス作品では、演者は観客に近づくこと、触れること、遊ぶこと、応答することを促し、ケアを求める存在と観客が対峙する場面を舞台化する。サエボーグ本人のほか日本と現地のパフォーマーによって会期中、演じられ続ける。



本展では、鑑賞者は受動的な存在にはなれない。 展示物に対する身振りや反応が、中央の生成システムによって観測・学習されているというストーリーを軸とするからである。日本館全体が「脈打つナーサリー」として立ち上がるWhat if?の空想は、観客の想像力を必要とすると同時に、建築空間全体を、用途を持った一つの舞台装置として見直す契機になる。

プロジェクト推進体制と実現可能性

本プロジェクトは、現代美術やデジタルテクノロジーを主軸とする提案でありながら、建築空間全体を一つのオントロジー（世界観）に仕立てる。それを実現させる上で、世界的建築事務所で大型インスタレーションの統括を担ってきたアンドレア・サモリーの知見を要に据え、吉阪建築の意図を精緻に解釈した上で、特殊な造形物の構造計算や施工管理を徹底する。また、ヴェネチア出身のサモリーが運河輸送や搬入、現地施工といった特有のハードルをクリアする上で優位性となり、資金面においても、国内外のテクノロジー企業や文化財団からの協賛を募る強固な実行体制を事前に形成済みである。（別紙出展作家リスト・予算表を参照）

出展作家

草野 絵美 代表キュレーター / 参加アーティスト



生成AIを用いた表現の解体と再構築を探究。本プロジェクトの核として全体ディレクションを主導し、情報環境の可視化と空間全体の概念設計を一貫して担う。

丹原 健翔 副キュレーター



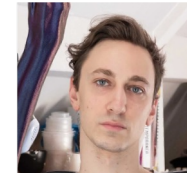
インディペンデント・キュレーター。これまで、100を超える地域芸術祭、企業展、アートスペースなど広い展示媒体のキュレーション・企画・運営を担当。本展ではコンセプトの理論およびサモリーとともに実装を担う。

サエボーグ 参加アーティスト



ボディスーツを用いたパフォーマンスによって、人間と非人間の境界を攪乱する実践を展開。その固有の物質性を活用し、デジタルな生命や身体のあるようを物理空間へ現前させる。

アンドレア・サモリー 参加アーティスト



ヴェネチア出身。約10年にわたり隈研吾建築事務所や名和晃平ら作家のインスタレーション統括を歴任。高度な建築的知見と3Dファブリケーション技術を駆使し、吉阪建築の構造を読み替える空間造形と実装を担う。

予算計画

項目	金額(万円)
空間施工・ インタラクティブ開発費	1,250
中央スカルプチャー ファブリケーション・施工	1,030
パフォーマンス・ 動的空間演出	1000
物流・運河輸送費	500
現地ロジスティクス・人件費	740
運運営・カタログ・広報費	480

制作スケジュール

2026年 5月～： 現地リサーチ、構造計算および詳細設計の開始
2026年 秋～： 部材の製造開始、映像コンテンツおよびAIシステムの開発
2026年 秋～： 中国・日本での部材製造、サエボーグとの映像コンテンツ制作

2027年 1月～： 国内での実寸モックアップを用いた空間検証とリハーサル
2027年 4月： 現地入り、1ヶ月間の施工およびパフォーマンスリハーサル
2027年 春： ヴェネチアへの輸送、現地インストールを経て開幕